

●平成 23 年度一般選抜（前期日程）についての講評等

単なる英語の知識を問うのではなく、課題文を通して受験生に考えさせ、考えた事を日本語・英語でまとめる力を問うことをねらいに作成されている。

1. 文脈を正確に把握できているか、自分の理解を自分の言葉で分かりやすく説明できるか、文法知識を活用して英文を組み立てられるかなどを試した。全体的に、この文章が何について書いてあるのか正確に捉えきれていない答案が目立った。

問 1 の正答率は 75%であった。問 2・3・4 は課題文の要点が理解できているかを試すことをねらいとした。問 2 については、attempts to standardize the language の attempts がどこを指しているかは分かっているが、それらを意味の通った言葉で説明できていない。問 3 については、regional variety が何を意味しているのか自分の言葉で説明できていない。ここでは county を country と誤解している受験生が少なくなかった。問 4 については、the levelling influence of television を 2 行上の standardize the language と関連づけて読んでいる受験生は少なかった。問 2・3・4 全体の正当率は 33%であった。問 5 の正答率は 40%だった。問 6・7 では、文脈を辿りながら、文法知識を活用して正しく英文を構成できるかを試した。文脈を把握できて、基本的な文法が身につけていれば容易に答えられる問題。正当率は約 50%であった。

2. 英検準 2 級から 2 級程度の難易度で出題している。アドミッション・ポリシーにある「十分な英語の基礎力」という観点から、5 種類のそれぞれ異なる内容の英文を聞かせて、その内容の全体像を捉える能力を試した。正当率は 65%であった。

3. 文脈から未知の単語の意味を読み取ったり、文脈を正確にたどりながら、課題文の要点を分かりやすい日本語でまとめることができるかを試した。設問 1 の場合と同じく、部分的には読めているが、文章の全体像を把握できていると思われる答案は少なかった。

問 1 については、文脈をたどりながら、適切な単語を選択できるかを試した。正当率は 44%だった。問 2・3 については、キーワードの中心的な概念をつかめているかを試すために、日本語で説明させたが、大半が断片的な説明に終始していた。正当率は 27%であった。問 4 については、指示代名詞の正確な理解のもとに英文を分かりやすい日本語に変えさせたが、life style と characteristics をうまく結び付けられなかった。正当率は 30%であった。問 5 英文の内容について、自分の考えまとめて英語で答えられるかを試した。英文全体についての曖昧な理解がそのまま答案に反映されていた。正当率は 40%であった。

4. 大学入学後に必要となる英文構成法に基づいて、論拠・理由を示しながら自分の考えを論理的に英語で表現できるかを試した。一応自分の考えを人に分かるように説明できる受験生が多かったと言ってよい。配点における得点率は 62%であった。

読解力を問う問題についての感想であるが、もう一度ここで強調しておく、下線部にだけ注目し、文脈の中で問題を捉えようとしていないことが誤答につながっている。従って、普段から、一つひとつの単語にとらわれず、全文の流れを把握することに全力を注ぐ習慣をつけることが読解力をつける近道である。